日本人は「NO」と言えないか

坂　本　　恵

1はじめに

「日本人はNOと言えない」と言われることが多い。実際、外国語で話すとき、英語の「NO」に当たる言葉を発するのに抵抗を感じた経験はたいていの人が持っているだろう。「『NO』と言えない」ということはどういうことなのか、また、それは本当なのかについて考えてみたい。

一般に日本語では「NO」ということは断りであり、否定であって、それは相手の言うことを否定するのみならず、相手の存在そのものをも否定することになりかねないものである。特に、丁寧に扱いたい相手に対しては、相手を否定することは何より避けられねばならぬことであるため、「NO」と言うことにためらいを感じるわけであろう。つまり日本語では「NO」と言うことは丁寧にするかどうかということに関係してくるため問題が複雑になる。しかし、「NO」と言うといっても状況は一つではない。状況によっていくつかの意味が考えられる。意味の違い、状況の違いなどから「『NO』と言わない」とはどういうことか、「『NO』と言えない」というのは本当なのかについて考えたい。

なお、ここでは、いわゆる「日本人」を「日本語母語話者」、「日本」を「日本語社会」と表すことにする。

2「『NO』と言わない」とはどういう意味か

「NO」と言わないということについては大きく分けて二つの意味がある。一つは相手からの依頼、誘い、許可求めなど、いわば相手からの働きかけに対してそれを断らないということである。これは言語表現を「行動展開表現」（注1）「理解要請表現」、「自己表出表現」に分けた場合の、「行動展開表現」に分類されるものであり、一言で言えば、「断らない」である。

もう一つは、相手の意見、主張などに対して反対を表明しない、つまり、相手の意見に対して「NO」と言わないということである。これは「理解要請表現」に分類されるものであり、同様に、「否定しない」と表されるものである。

この「NO」と言うふたつの場合としての「断り」と「否定」はかなり性質の異なるものであり、「NO」と言う意味もその表し方も大きく違っている。この2者を別々に考えてみたい。

3「断り」の場合

相手から何かの誘いを受けたり、何か頼まれた場合にそれを断るのはなかなか難しいことである。上下関係にある上位者に対してや、特に相手に対して丁寧にしたい場合には特に難しい。相手に配慮したために断ることができなかったというような経験は誰にでもあろう。特に仕事上の上司と部下などの業務上の上下関係があるような場合、業務上の依頼は「指示・命令」となり、断ることができないものとなる。業務上ではなくても上司からの「依頼」は断りにくいと感じる人が多いと思われる。

しかし、それは「断る」ことができないということを意味するものではない。その依頼などの実現が不可能に近いとき、難しいときには断ることもあり得る。相手が上司であったり、丁寧にしなければならないからといって、断ることができないということはない。文化によっては、親しい間柄や義理のある相手の依頼などは断ることができない、断らないものであるということもあるときく。それに比べると日本語の社会では依頼などを断ることは可能であるといえよう。また、親しい間柄では、断ることはそれほど抵抗のないことであるように見える。

また、断ること、「NO」と言うことが難しいからといって、断らずに「YES」の返事をした上でそれを無視することができるだろうか。たとえば、家に来るように誘われたときに、気が進まないからといって「はい、行きます」と言っておいて実際には行かない、などということが許されるだろうか。そのようなことはあり得ないように思うかもしれないが、相手に丁寧にするために断りはしないが、実際にはその行動をしない、という文化もある。行く、行かないといった約束の意味が文化によって異なることは事実である。行く、行かないという約束がそれほど厳密なものではないのならば、面前では相手を否定せずに肯定の返事をした上で、実際の行動ではその通りにしないということもあり得ると思われる。実際、何人かの留学生を自宅に招いたときに、承諾の返事をした人数分の準備をしておいても、返事をしながら来ない人や、返事なしにくる人、さらには友人を

連れてくる人などがいて困惑させられた経験は留学生と付き合いのある人は必ずといってよいほど持っているものである。これは、約束の持つ意味、訪問の意味が日本語社会とは異なった文化を持つ人がいるということを表すものである。

しかし、日本語社会では、約束を守ることは何よりも大切なことであり、行く、行かないということを明らかにすることも重要なことである。肯定の返事をした上でそれを実行しないときは非難される。その意味で「NO」と言うこと、断ることは必要なことであり、大切なことである。実際、社会生活の中で依頼や誘いを断ることは多いと言える。それでは、実際には断る、「NO」ということが多いにもかかわらず、我々自身も「NO」と言えないように感じ、また、「NO」と言えないように受け止めらるのはなぜだろうか。

実際には依頼などを断ることがあり、日本語母語話者の間では問題なく断りの意志を通じさせることができる。しかし日本語母語母者の「断ったつもり」が、非日本語母語話者に通じにくいということなのである。よく「日本人は曖昧だ」といわれる所以である。断っているのにそのように受け取られないということである。それは、直接的には断らない、つまり「NO」と言う言葉は言わないで断る、ある意味では一見断っていないように見える形で断っているからである。実際には、「ちょっと」などの言葉が断りのサインとなる。それ以外にも、言葉を濁すことによって、または、語調によって「NO」を伝えることができる。「NO」という言葉を使っていないだけで、実質的にはその意図を実現しているわけである。従って、「日本人は『NO』と言えない」のではなく、「日本人は『NO』という言葉を言えない」と言った方がよいだろう。「NO」という言葉を使わずに断るわけであるから、非日本語母語話者にとってはそのルールは見えにくく、わかりにくいものであるのは当然だと言えよう。さらに、実質的には相手からの働きかけを「断る」わけであるから、ある意味では相手の「面子（メンツ）」をつぶすことにもなるわけで、それを和らげるためにできるだけ遠回しな言い方になったり、笑顔を見せたり、いわゆるお愛想を言ったり、さらにはいいわけをしたり、次回を約束したりしたりすることになる。そのため、断っているということが、一見一層わかりにくくなるわけである。実際のところ、積極的に受け入れなければそれはすべて断りといってもよいと思う。聞く方もそれを想定しているため、日本語母語話者間では、このことについて大きな混乱は起こらないのであ

る。それでも、地方によって、また、特定の社会階層、グループによってその約束事や、言い回しが違うために、うまく通じないことがあるのも事実である。政治家や役人の言う「考えておきます」が実際には断りの表現であることなどもその一例である。日本語社会では「NO」という言葉を使わずに、いかにソフトに相手に断りの意志を通じさせるかを誰もが工夫しており、それがある程度まではルール化されているということであろう。

4「否定」の場合

それでは、もう一つの場合、相手の言うことに対して「NO」を言う、つまり、相手の言葉を否定するかどうかについてはどうだろうか。日本語社会では、人格とその意見は切り離して考えられないことが多い。それは、何であれ、相手の意見を否定することは、そのまま相手を否定することにつながるということである。人間関係をそのまま保った上で議論を楽しむという風潮は定着しているとは言い難い。相手に対して意見を言うことはそれだけで相手の全人格を否定しているともとられかねない。特に、丁寧さが絡む場面、上下関係のある場合や、配慮すべき相手に対しては、反対意見を持っていても言わない、形式上だけでも同意すると言うことがあるだろう。この場合は、行動展開表現の場合とは異なり、「NO」ということ伝えなくてもそれが約束違反などにつながるおそれはない。従って、丁寧さを重視する場合、あえて「NO」と言う、相手の言葉を否定する必要はないわけである。

しかし、それは、あらゆる場合に「NO」と言わないことを意味するものではない。人間関係に配慮する必要がないとき、親しい間柄にある場合などには、相手の言葉を否定することも実際には多いと思われる。また、相手に配慮する場合でも、言葉を選べば反対意見を言うことも可能である。ここでも、「そうではない」とか、「それは違う」などの直接的な言葉は避けられ、間接的な言い方が好まれる。直接的な否定は相手の全人格を傷つけるものと思われてしまう。そのような否定を避ければ、相手の言葉を否定することは可能というわけである。学会などで見られるように「ここがよくわからないから教えていただきたい」や「この点についてはどう考えているのか」などの質問が、実際には相手の意見に対し反対であることを示していることがある。また、話し言葉の中では、「そうね、

でも・・・」など、一度相手の言葉を受けてから、それと異なった自分の意見を示すことも多い。一種流行語であるともいえる「って言うか」はこの俗語的な言い方となり、その後には相手とは異なる見解が続くことが多いように思う。日本人は「NO」とは言わず、「YES、BUT・・」と言うと言われることが、それを示している。それが日本語のルールなのであり、日本人の「YES、BUT・・・」は実質「NO」であることを知るべきである。

ただし、最近の学生の間では、お互いに面と向かっては一切相手を否定するようなことは言わない、というルールがあるようである。傷つけあうことを極力避けたいと言うことであろうか。或いは、否定のルールが変わりつつあるのかもしれない。

5「NO」と言わねばならない場合

以上の議論とは別に、日本語社会の中では、相手からの働きかけや言辞に対して「NO」と言わなければならない場合がある。例えば、食べ物や飲み物を勧められたときや、重要な役につくように請われたときなど、一度は遠慮することが期待される、或いは、遠慮した方が丁寧だ、「おくゆかしい」と思われるようである。また、ほめられたときにはそれを否定することになっている。何であれ自分についての好意的な言辞に対しては否定的にとらえることになっているのは事実である。これは特に、本当にほめている場合ではなく、形式的なほめ（注２）、いわゆる「お世辞」「お愛想」で言われるときに使われる方略である。「お世辞」や「お愛想」を言われたときにそれを真に受けて「ありがとう」などとお礼を言ったならば、間が抜けているように思われる。日常的に相手をほめることの多い英語社会の中で、ほめられたときに相手を否定する日本語母語話者の反応が批判されることもある。また、再度すすめられることを期待してすすめられたものを断ったら、二度とすすめられなかった、などという経験談もよく聞くところである。事象だけを見れば、滅多に相手を否定しない日本語母語話者の、特異な反応に見えるだろう。

これらはどちらも、自分に利益のある場合と分析できる。自分に利益のある相手からの働きかけや言辞はいったんそれを否定することが丁寧さの原則にかなったものとなるということである。相手からのすすめを断ったり相手を否定すると

いう一見失礼な行動、日本語母語話者が行わないといわれる行動も、自分に利益のあることを簡単に受け入れにくく、また自分をよく言われる、自分に利益があることを認めることよりも日本語母語話者にとっては容認できるものなのである。

6おわりに

日本語母語話者の「NO」と言う、言わないという行動はどちらも丁寧さの原理にかなったものであると言える。言わないということも、「NO」という言葉を言わないだけで、実際にはその意志は示している、別のルールが働いているだけだということがわかる。この現象は日本語に特有のことだろうか。「断り」の場合も「否定」の場合も、自分の言葉でも同じだ、という留学生は多い。どの言語でも多かれ少なかれ、また、それぞれ異なった形式で丁寧さの原理を持っているものである。言語によりその表し方が異なるだけなのである。事実、日本語では直接には断らない、否定はしないと説明すると、それは自分の言語でも同じだという留学生もいる。このような表し方は日本語社会での特異な例というわけではなく、似たような文化を持ったところも多い。ただし、それをどう表すかについては言語により、文化により、異なったところがあるということなのであろう。

注1注2

川口、蒲谷、坂本「待遇表現としてのほめ」『日本語学』15－5明治書院1996.5